

回遊性種飼付け実用化事業（要約）

漁場環境科 明 神 寿 彦

飼付け型栽培漁業管理技術開発事業（平成元～5年度）及び回遊性種飼付け実用化事業（6年度～）では、シマアジを対象として、放流初期における不合理漁獲や減耗を防止し、放流効果を向上させることを目的に、飼付け手法を用いた放流技術の開発試験を行ってきた。その結果、シマアジは放流後の数ヶ月間、高い割合で飼付け基盤に滞留し、比較的飼付け手法に適した魚種であることがわかってきた。

しかし、経済性を考慮に入れた飼付け方法の開発や、商品サイズとなった放流魚の効率的な回収など、解決すべき課題は残されている。

平成9年度の試験結果の詳細については、既報（平成9年度回遊性種飼付け実用化事業報告書）で述べているので、ここにはその要約を記す。

1 中間育成

平成9年4月15日にシマアジ人工種苗50,000尾（T.L.35mm）を大分県の日裁協上浦事業場から大月町古満目まで海上輸送し、古満目湾の小割生簀で中間育成した。

4月15日に中間育成を開始したシマアジは11月19日には尾叉長13.2cmに成長し、生残尾数は39,700尾で、生残率は79.4%であった。

2 飼付け試験

(1) 平成9年11月19日にシマアジ39,700尾（F.L.13.2cm）を古満目湾へ放流した。2週間後に水温の急降下が原因と思われる逸散が起こり、滞留尾数は約5,000尾となった。

(2) 平成10年1月20日と2月13日に潜水夫が配合飼料を撒きながらシマアジを海底に誘導した。しかし、シマアジは一時的に給餌パイプの先端付近まで来るが、すぐに浮上し表層に分布するようになった。

(3) 平成8年放流群は平成9年6月16日まで給餌を継続した。滞留尾数は、平成9年2月に25,000尾、

給餌を打ち切った6月には約10,000尾と推定された。

(4) 古満目湾外の定置網に入網したシマアジとは同時期にサンプリングした滞留魚の尾叉長を比較した結果、大型の個体が先に湾外に出て（逸散して）いるのではないかと考えられた。

(5) 平成8、9年放流群の胃内容物調査の結果、9年放流群はすべて配合飼料等の「餌」であったが、8年放流群については、翌年6月の時点で39%が天然餌生物を捕食しているのが確認された。

3 漁獲実態調査

飼付け基盤周辺海域におけるシマアジの漁獲動向を把握するため、漁獲量調査及び市場調査を実施した。

(1) 平成9年の宿毛市漁協のシマアジ水揚量は、8年をさらに下回る968.9kgであった。また、古満目漁協においても、定置網のみの水揚（128.6kg）で、8年を若干上回ったものの低水準で推移している。

(2) 宿毛市漁協と古満目漁協においては、平均単価は堅調に推移したものの、水揚金額は8年をさらに下回る273万円であった。

(3) 市場調査の結果、宿毛市漁協に水揚げされたシマアジのうち放流魚の占める割合は重量で24%であった。

4 平成3～8年度放流群

平成3～8年度放流群のシマアジについて、市場調査の結果から回収率等（平成9年12月現在）を推定した。

(1) 平成3年放流群の推定回収率は5.03%であった。

(2) 平成4年放流群の推定回収率は2.77%であった。

(3) 平成5年放流群は、一時的に放流魚が大量漁

獲されたが、それを除いた推定回収率は2.61%であった。

(4) 平成6年放流群の推定回収率は現在のところ0.29%と低い、その原因は不明である。

(5) 平成7年放流群の推定回収率は0.70%で、3～5年放流群に比べ低くなっている。

(6) 平成8年放流群の推定回収率は1.29%で、放流から日が経過していないものの、近年の放流群に比べ比較的高い値となった。

(7) 平成9年に再捕されたシマアジのほとんどが、平成8年の放流魚であり、大型魚の再捕が少なかった。